

蛙のゴム靴

宮沢賢治
みやざわけんじ

松の木や檜ひのきの木の林の下を、深い堰せきが流れて居をりました。岸には茨いばらやつゆ草やたでが一杯にしげり、そのつゆくさの十本ばかり集った下のあたりに、カン蛙がへるのうちはありました。

それから、林の中の檜ひのきの木の下に、ブン蛙のうちはありました。

林の向ふのすゝきのかげには、ベン蛙のうちはありました。

三疋びきは年も同じなら大きさも大てい同じ、どれも負けず劣らず生意気で、いたづらものでした。

ある夏の暮れ方、カン蛙ブン蛙ベン蛙の三疋は、カン蛙の家の前のつめくさの広場に座って、雲見といふことをやって居りました。一体蛙どもは、みんな、夏の雲の峯を見ることが大すきです。じっさいあのまっしろなプクプクした、玉髓ぎよくずるのやうな、玉あられのやうな、又蛋白石たんぱくせきを刻んでこさへた葡萄ぶどうの置物のやうな雲の峯は、誰たれの目にも立派に見えますが、蛙どもには殊にそれが見事なのです。眺ながめても眺めても厭あきないのです。そのわけは、雲のみねといふものは、どこか蛙の頭の形に肖にてゐますし、それから春の蛙の卵に似てゐます。それで日本人ならば、丁度花見とか月見とかいふ処ところを、蛙どもは雲見をやります。

「どうも実に立派だね。だんだんペネタ形になるね。」

「うん。うすい金色だね。永遠の生命を思はせるね。」

「実に僕たちの理想だね。」

雲のミネはだんだんペネタ形になって参りました。ペネタ形といふのは、蛙どもでは大へん高尚かうしやうなものになってゐます。平たいことなのです。雲の峰はだんだん崩れてあたりはよほどうすくらくくなりました。

「この頃ころ、ヘロンの方ではゴム靴ぐつがはやるね。」

ヘロンといふのは蛙語です。人間といふことです。「うん。よくみんなはいてるやうだね。」

「僕たちもほしいもんだな。」

「全くほしいよ。あいつをはいてなら粟くりのいがでも何でもこはくはないぜ。」

「ほしいもんだなあ。」

「手に入れる工夫はないだらうか。」

「ないわけでもないだらう。たゞ僕たちのはヘロンのとは大きさも型も大分ちがふから拵こしらへ直さないと駄目だめだな。」

「うん。それはさうさ。」

さて雲のみねは全くくづれ、あたりは藍色あゐになりました。そこでベン蛙とブン蛙とは、「さよならね。」と云いってカン蛙とわかれ、林の下の堰を勇ましく泳いで自分のうちに帰って行きました。

※

あとでカン蛙かへるは腕を組んで考へました。桔梗色ききやうの夕暗ゆふやみ中です。

しばらくしばらくたってからやっと「ギツギツ」と二声ばかり鳴きました。そして草原をペタペタ歩いて畑にやって参りました、

それから声をうんと細くして、

「野鼠のねずみさん、野鼠さん。まうし、まうし。」と呼びました。「ツン。」と野鼠は返事をして、ひょこりと蛙の前に出て来ました。そのうすぐろい顔も、もう見えないくらゐ暗いのです。

「野鼠さん。今晚は。一つお前さんに頼みがあるんだが、きいて呉くれないかね。」

「いや、それはきいてあげよう。去年の秋、僕が蕎麦団子そばだんごを食べて、チブスになって、ひどいわづらひをしたときに、あれほど親身の介抱を受けながら、その恩を何でわすれてしまふもんかね。」「さうか。そんな

ら一つお前さん、ゴム靴^{ぐつ}を一足工夫して呉れないか。形はどうでもいいんだよ。僕がこしらへ直すから。」